

京都市左京区の京大北部構内にある「京大植物園」。

ここで毎月一回、一般を対象にした観察会を開いているのが、京大職員や名誉教授らでつくる「京大植物園を考える会」だ。観察会が「都会の中の身近な自然」に対して住民が目を向けるきっかけになったなどとして、八月に北海道で開く日本環境教育学会で、考える会は四年目に入った取り組みについて発表する。(宮川弘)

「あれがヒトヨタケ。酒を飲みながら食べると中毒になります」と講師が指さす方へ、学内外から参加した約五十人の視線が一斉に注がれた。六月の観察会のテーマは「植物園のきのこたち」。園内には百五十五種のキノコも生える。講師の説明をメモし、虫眼鏡で熱心に観察する参加者たちの中に、尾池和夫総長の姿もあった。地震学が専門の尾池総長が「植物園の下には花折(はなおれ)断層が走っている」と解説すると、参加者の男性が「家が近くだが、大丈夫だろうか」と不安げな表情を見せた。

京大植物園は一九三三(大正十二)年に造られ、理学部付属植物園(現・理学研究科)

植物園)として、大学の研究や教育活動に使われてきた。

広さは約二畝で、確認されているだけでも、メタセコイヤなど約五百種千本の樹木が茂る。クモ類を中心にした昆虫や鳥類も見られ、いわば「都会の中のオアシス」だ。園内外の珍しい植物を集めるだけでなく、生態学的に特色を持たせる方針に基づき、琵琶湖疏水から水を引いた水路や湿地、洞窟(どくく)なども配している。

管理は、長く理学部の植物学教室が中心になってきたが、今は理学研究科の教員でつくる植物園管理運営委員会が担当する。「植物園をフィールドに多くの学術論文が発表され博士号を得たものも多し。ただ、分子生物学が主流

京大一角で、森林浴、



京大植物園で定期的に開かれている観察会。都会のオアシスともいえる植物園。いずれも京都市左京区で



樹木500種 一般向けに観察会

の今の植物学教室の教員の関心は低い」と、会の大石高典さん(京大大学院生)は嘆く。二〇〇二年、植物園に隣接する農学研究科の温室の日照確保などを理由に、園内の樹木約三十本を大学側が伐採したのをきっかけに、翌〇三年に考える会が発足。植物園を

から解説する。ただ、考える会会員の昼休みを使っているため、開催は平日の昼間、時間にして一時間足らずというのが実情だ。次回の観察会は、夏休み中ということもあり、八月二十六日の土曜日、時間もいつもより長めの二時間を予定。植

物園だけでなく、近くの吉田山にも出向き、植物を観察する計画だった。問題は土曜日開催が認められるかどうか。結局、土曜日開催について委員会が不許可としたため、植物園には入れない。ただ「委員会は「もっと早くから申請が出ていれば」としており、休日開催が全くだめということではない」と考える会の影山貴子さん(京大職員)。今年五月、植物園の在り方について尾池総長と懇談した際、総長は考える会の活動を評価し、後押しする姿勢を見せた上で「土、日曜日に植物園が閉まっているのはよくない」と発言しており、会は今後も休日開催の実現を粘り強く働きかけていく方針だ。

